

第13回 現地での一番の収穫は何ですか？

著者	荒神 衣美
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	IDE スクエア -- コラム おしえて！知りたい！途 上国と社会
ページ	1-4
発行年	2020-09
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00051822



第 13 回 現地での一番の収穫は何ですか？

2020 年 9 月
(2,477 字)



現地に長期滞在したり、出張などで訪れたりするなかで、
どんな収穫がありましたか？なかでも一番の収穫は何ですか？

私はベトナムの農村発展について研究をしています。研究のため、ベトナムのホーチミン市に 2010 年から 2 年間滞在しました。また、その他にも毎年 1~2 週間ほど、出張でベトナムの地方都市を含むさまざまな町に滞在しています。これまでの現地滞在では、公私にわたって、いろいろな収穫がありました。ベトナム語を覚えられたこと、調査に協力してくれる現地の研究者と知り合えたこと、土地勘が養われたこと、おいしいベトナム料理をたくさん食べられたこと……。

そのなかでも一番大きな収穫だと思っているのは、日本にいても現地の「空気」を感じられるようになったこと、さらに言えば、そうした感覚の土台になっている現地の（必ずしも研究者ではない）人たちとの交流です。ここでいう「空気」は「空気を読む」の空気、つまり社会の雰囲気や人々の考え方の傾向などのことを指しています。現地の人たちとのさまざまな交流を通じて、「こういう時、ベトナムの人たちだったらこう考えるだろうな／こう反応するだろうな」という想像ができるようになったことは、現地の社会を理解するうえで、大きな助けとなっています。

とくに、長期滞在中のお手伝いさん一家との交流からは、多くを学びました。2 年間通いで家事を手伝ってくれたティンさんは、とてもおしゃべり好きな女性で、毎日掃除や料理をしながら、家族のこと、近所で起こった出来事、買い物事情や政治

に対する感想など、いろいろな話をしてくれました。そんな日々のおしゃべりを聞いたり、時にはティンさんやその親戚のお宅にお邪魔したりするなかで、ベトナムの人たちがどのような生活を送っているのか、どんなことを問題だと感じ、どう問題に対処する傾向があるのか、といったことが少し分かるようになってきました。

たとえば、ベトナムでは日々の生活を円滑に進めるうえで、「紹介」や「贈り物」が求められがちです。警察に交通違反を取られたときにお金を払って見逃してもらおう、子どもをよい企業に就職させたいときに企業の幹部やその知り合いに贈り物をする、などなど。聞いている私の方が憤りたくなる状況もあつたりしますが、当の本人たちは淡々としたもので、いかにうまく立ち回るかを知恵の見せ所と捉えているようにすら思えます。

上記にも関連しますが、ベトナムの人たちは何か目的を達成するうえで、形式にそれほどこだわらないように思います。長期滞在中のある日、私が住んでいたマンションで火災報知器の点検作業がありました。日本では通常、加熱試験器という特殊な道具が用いられますが、私の家にやってきた作業員は、梯子に上るやいなや、なんと耳に挟んであつたタバコを自ら吸い、火災報知器に煙を吹きかけて点検をしていました。日本ではありえない方法ですが、火災報知器のしくみを考えたら、こんな方法でも点検はできるわけで、「こうあるべき」という形式にとらわれないベトナムの人たちの柔軟さ・大らかさに、目から鱗が落ちる思いでした。

さらに、ベトナムの人たちは、何か困ったときや重大な決断をしなければならないとき、実はけっこう占いに頼りがちです。結婚相手や時期、家の購入場所や時期といった個人の人生における決断から、重要な政治会議における席順にまで、占いが関与していることが珍しくありません。私もベトナムに長期滞在中、うまくいかないことがあつたときに、占い師にみてもらうことをティンさんから強かに勧められました。そして、日本に帰国してからも数年は、占い師が示した対処法（〇〇の方角に頭を向けて寝るなど）をちゃんと続けているかどうか、ベトナム出張に行くたびにティンさんに確認されたものです。

このような、日本の「当たり前」とは異なる、現地の「当たり前」に触れたことによって、私の研究関心はずいぶん広がりました。長らく農産物の生産・流通について研究していましたが、最近は、農家出身の若者たちがどのようなキャリアパスを歩むのか、その選択には上で挙げたような社会の「空気」がどう影響するのか（大学進学や大企業への就職では「紹介」や「贈り物」が障害となっているかもしれない。そもそも、大学進学や大企業への就職が理想のキャリアとは考えられていない

かもしれない。はたまた、進学・就職する場所などに占いが関係していることもあるかもしれない！)、結果として次世代の農村はどんな風になっていくのか、といった点へ関心が広がっています。私にとって、現地での「空気」を理解できるようになったことは、地域の実態に根差した研究課題や分析視覚を設定するために欠かせない収穫だったと思っています。



メコンデルタの稲作農村にて（2014年 筆者撮影）

いろいろな情報がインターネットを通じて集められるようになったいま、現地に出向くメリットは、一昔前より見えにくくなっているかもしれません。しかし、現地に行かなくても集められる情報を読み解くときに、現地の「空気」を感じることができると、実感をもって状況を理解することができますし、何より、情報が色鮮やかで立体的に見えてきて、楽しいです。コロナウイルス感染拡大の影響で、当面は自由な渡航が難しいかもしれませんが、感染が収束した後、もし機会があれば、みなさんもぜひ現地に行ってみてください。きっと想像以上にいろんな収穫があると思います。

回答：荒神衣美（こうじんえみ）

回答者プロフィール

荒神衣美（こうじんえみ） アジア経済研究所 地域研究センター研究員。ベトナムの農業・農村発展について研究しており、2010-12年に海外派遣員としてホーチミン市に滞在。現地滞在中の生活について書いたエッセイに、「[コートインと過ごした1年半——南部ベトナム人の魅力](#)」『アジ研ワールド・トレンド』196号（2012年）、「[エアコン掃除の常識](#)」『アジ研ワールド・トレンド』208号（2013年）など。